

歴史の中の女たち

<第12回>

カミラの禁じられた恋

伊藤 滋子



カミラ・オゴールマンがブエノスアイレスの中心街にある家から忽然と姿を消したのは1847年12月のことであった。間もなく、同じ地区のソコロ教会の僧でカミラの聴罪師でもあるラディスラオ・グティエレスもいなくなっていることが分かって大騒ぎとなり、噂はたちまち町中にひろがる。カミラは身長が178センチ、色白で栗色の髪の毛、均整のとれた容姿に加えて、ピアノやギターを弾きながら美しい声で歌い、しかも明るい闊達な性格だったから、あちこちの家で頻りに開かれるパーティーではいつも人気者だったし、教会でもよく聖歌を歌い、時の権力者ロサスの娘マヌエラとは大の仲良しでその家にも出入りしていた。当時の娘の常として、母

親から家の管理、裁縫、刺繍などをみっちり仕込まれ、良き妻、良き母となるように教育されてきた。他の娘と少しばかり違うところといえば、読書好きで、ロサスが禁書にしている本までこっそりと本屋に頼んで入手していたことぐらいだった。

一方、ひたむきな眼差しをした若い僧ラディスラオはトゥクマンの出身で、その地方の州知事の甥であったが、縮れた黒髪に褐色の肌をして、背もカミラより低く、彼女の父親は娘がそのように不釣り合いで、しかも僧籍にある男と駆け落ちするなどとはどうてい考えられず、10日も経ってからようやく、カミラは誘拐されたと官憲に届けでた。ブエノスアイレスの司教も、このような大罪を犯した破戒僧を草の根を分けても探し出し、厳罰に処して頂きたい、とロサスに願いでた。オゴールマン家はアイルランド、フランス、スペインの血をひくブエノスアイレスの上流階級に属する名家で、カミラは6人きょうだいの5番目であった。長兄は官吏の道を歩んで後にこわもてで聞こえた警察学校の創始者となり、別の兄はイエズス会の学院に入ってラディスラオとは机を並べた間柄であった。

1767年にスペイン王カルロス3世が出した追放令によってイエズス会は全スペイン領から追放され、ブエノスアイレスの学院もこの時閉鎖された。それまで教育は全面的にイ

エズス会の手に乗ねられてきたので、追放によってできた教育の空白は大きく、1816年の独立後もその状況は変わらなかった。ロサスも教育機関を設ける必要性は常々感じていたのだが、独立によってたがが外れて混乱に陥った国をまとめることに忙殺され、ようやく1836年になって、イエズス会を呼び戻し教育を立て直そうと図った。こうして70年ぶりに6人のイエズス会士がスペインから到着した。長らく閉鎖されていた学院の建物の傷みは思ったほど激しくなく、ロサスの十分な財政援助の下に早急に整備され、上流の人々はこぞって子弟を学院に送った。

会士たちが目にしたブエノスアイレスの町は活気にあふれ、美しかった。碁盤の目の様に整然と道路が引かれ、堂々とした鉄の門構えの石造りの家々はバルコニーを備えた二階建ても多く、玄関口の上部には各家の紋章が飾られ、奥には噴水を備えたいくつもの中庭があった。だが不思議なことに町中にやたらと赤い色が目につく。女たちは高く結った髪を赤いリボンで結わえ、道行く人々の多くがどこかに赤い布切れを身につけている。兵士の制服も赤い。壁や門、窓枠なども赤、街角に立てられている馬をつなぐ柱まで赤く塗られていた。

ロサスは1829年から53年までの23年間、独立して間もないアルゼンティンを治めた独裁者である。この国はブエノスアイレスだけが商業や港から上がる関税で突出した経済力を持ち、独立後は、ブエノスアイレスが地方を支配しようとする中央集権派と、首領（カウディリョ）たちによる地方自治を主張する連邦派が対立して覇権を争った。前者は外国の文化を取り入れ、革新的なのに反して、後者は伝統を重んじ、外国の影響を排斥しようとした。ロサスはブエノスアイレス出身でありながら、若い時から田舎で暮らして父の牧

場を管理していたことから、心情的にはパンパ（大平原）に生きるガウチョ（牧童）や、カウディリョ（地方の有力者）と軌を一にする連邦主義者であった。彼が政権をとると、妻のエンカルナシオンが差配するマソルカと称する秘密警察が徹底的に中央集権派を弾圧し、大勢の人を誘拐、拷問し、殺戮する恐怖政治を行った。犠牲者の数は数千人、国外への亡命者は3万人にも達したと言われる。赤はロサスに忠誠を誓う連邦派の目印だったので。オゴールマン家も連邦派の有力なメンバーであった。

教会の祭壇にまで自分の肖像画を飾らせて権力を誇示したロサスのこと、自分が呼び寄せたイエズス会士にも赤の記章を身につけて服従を誓わせようとした。しかし「戦う軍団」という異名を持つイエズス会のこと、絶対服従を誓うのはローマ教皇に対してだけで、為政者に簡単に膝を屈するような人々ではない。相容れることのない両者はことあるごとに衝突して溝は深まる一方で、ついに5年後の1841年、会士たちは隣国のウルグアイへ脱出し、モンテビデオに新しい学院を開いた。ブエノスアイレスの学院は『連邦共和国学院』と名を変えて、イエズス会を脱退した教師たちの手で政府の学校として運営が続けられた。

地方都市トゥクマンからきてイエズス会学院に入ったラディスラオは会の追放によってイエズス会士になることはできなかったが、無事神父として叙品され、今なお二つの塔を備えた美しいたたずまいを見せているソコロ教会の僧となった。そして友人の家であるオゴールマン家をしばしば訪れ、時おりカミラと馬をならべてパレルモを散策する姿が見られた。パレルモは今では広大な美しい公園となっているが、当時はブエノスアイレスの郊外で、ロサスの屋敷もそこにあった。カミラ

がラディスラオと初めて出会ったのは彼女が18才の時、信仰篤く教会の活動にも熱心だったから、足繁く教会に出入りしたとしても不審がられることはなかった。二人がいつから愛し合うようになったのかは分からないが、独身の誓いをたてて僧となった青年と上流の娘の結婚が許される筈もなく、二人は情熱の赴くまますべてを捨てて誰にも知られない土地へ逃げ、普通の夫婦として暮らす道を探そうとしたのだった。

馬でブエノスアイレスを後にした彼らは北をめざした。サンタフェ、エントレリオス、コリエンテスを経て、最終的にはブラジルのリオ・デ・ジャネイロまで行くつもりだった。まずサンタフェで、紛失したと言って、偽名で新しい旅券を入手することに成功する。そのおかげでコリエンテスに近い小さな村、ゴヤで子供たちのための学校を開くことができた。そこにしばらく滞在し、お金を貯めて旅費を作ろうとしたのである。人好きのするカミラはすぐに村の人たちと打ち解け、人々も彼らに感謝して親切で、なにくれとなく面倒をみてくれた。何もかもがうまく行き、二人は幸せだった。カミラの胎内には新しい生命が芽生えていた。

だがゴヤに落ちていて4ヶ月後、お腹の膨らみもずい分目立ってきた頃、突然その幸福は断ち切られた。村人の家に招かれた彼らはそこでバツタリとラディスラオの知り合いのアイランド人神父と出会ってしまった。翌日、その神父の通報で二人は捕えられて別々に投獄され、一切の外界との連絡を断られた。ただカミラがロサスの娘マヌエラに宛てた手紙だけは届けられた。マヌエラは心優しい女性で、血塗られた出来事に満ちたロサスの生涯のなかで唯一の安らぎであった。すぐに返事がきて、そこには「心配しないでしっかりして！私が助けてあげるから」と書かれ

ていた。実際マヌエラはすぐさま、問題を起こした女性を収容する尼僧院にカミラの部屋を手配し、家具を買ったりしてそこを整え、またラディスラオのためには市役所の牢に歴史や文学の本を運ばせるなどのこまごまとした心遣いを見せて二人の到着を待った。

一方、ロサスは彼らが捕えられたことを知ると、すぐさま二人をブエノスアイレスに護送するように命じた。ところが運ばれた先はマヌエラの考えた市役所の牢ではなく、政治犯や重罪犯を収容する郊外の刑務所であった。カミラは取り調べにあたったロサスの側近レイエスから、誘拐されたと供述すれば罪が軽くなると示唆されたが、「わたしは決してむりに連れて行かれたのではありません。むしろ躊躇するかれを自分の方から積極的に誘ったくらいです。彼は神父になる誓いをたてましたが、心の隅に、本当にこれが天命かどうかという疑問を抱きながらそうしたのですから、その誓いは無効でした。私たちは神の前では立派に夫婦です。そして私は自分のしたことを後悔していません」と毅然と述べて、これまでのいきさつを詳しく話した。

しかしカミラの言はロサスの神経を逆なでし、彼は即座に二人に銃殺刑を命じた。その命令を受け取ったレイエスはすぐさまパレルモにあるロサスの家に、カミラが妊娠しており、しかも臨月に近いことを伝えた手紙を医師の証明書とともに送り、マヌエラにもそれを伝えようとした。ところがその手紙はたまたま不在だった父娘の手には渡らず、ロサスは手紙を読む前に、刑がまだ執行されていないと聞いて怒り、すぐに刑を執行せよと命じたのであった。もしもカミラがロサスの前に身を投げ出して助けを求めてきたならば、かれは二人を許したかも知れなかった。実際、当時ひそかに妻帯していた僧がなくもなかつ

たが、ロサスはそれを咎め立てもせず、大目に見ていた。しかしおおっぴらに駆け落ちするという手段に訴えて大きなスキャンダルを引き起こしておきながら、許しを乞うどころか、全く反省の色も見せず、自分を正当化しようとするカミラの態度に彼は自分の権威をないがしろにされたように感じたのであった。独裁者の常として彼は自分に膝を屈するものには鷹揚であったが、反抗するものや敬意を失するものには容赦がなかった。

胎児に洗礼を授けるために、カミラの口から水が流しこまれ、二人は時をおかず刑場に引き出された。眼隠しされた彼女の目からはとめどもなく涙が流れた。ラディスラオは「自分は殺すがよい。しかし彼女は助けてくれ！こんな身体だというのに・・・かわいそうに」と叫んだが、その声は発射の合図に打ち鳴らされた太鼓の音にかき消された。この時カミラは、「私たちはあの世で結ばれます」と言うがごとく、天を指さしながら倒れた。1848年8月18日のことで、カミラ20才、ラディスラオ25才であった。ロサスは当初からカミラを極刑に処すつもりではなく、人目につかないように船でブエノスアイレスへ運ばせて暗闇にまぎれて上陸させ、尼僧院へ送りこむつもりであったらしい。しかしその船が座礁を起こし、二人は幌付きの荷車に移しかえられてブエノスアイレスへ運ばれた。馬車は予想よりも早く着き、昼日なか、ものものしい護衛に守られて街道に入ってくる一隊はいやでも人目を引き、彼女をこっそりと僧院に収容するわけには行かなくなった。悲劇は常にいくつもの不幸な偶然が重なって起きる。

この処刑は世間に大きな衝撃を与えた。女性を銃殺刑にするだけでも前代未聞のことなのに、もうすぐ赤ん坊が産まれるという女性を銃殺刑にしたのだ。しかしこの事件をめ



ぐってさまざまな論議が巻き起こりはしたが、カミラの家族をはじめ、処刑を面と向かって非難する声はほとんど上らず、ロサスに対抗する中央集権派も、（ロサスの手の届かないモンテビデオからではあるが、）長期にわたる独裁政権が市民の道徳を墮落させたといったでただけで、カミラに対する同情の声はついで聞かれなかった。当時の社会通念では、不道徳とされることであっても、それを家庭内に閉じ込めて、表沙汰にさえしなければ不問にされた。カミラの恋も本来隠しておくべきだったのに、彼女は純粹さゆえに、そうしなかったことを非難されたのだった。駆け落ちが世間に知れわたると、ラディスラオをソコロ教会の僧に据えたとされるカテドラルの高僧は批判をかわすためにロサスに手紙を送り、ラディスラオにその席を与えたのは司教であって私ではない、と弁明に必死だった。その高僧自身は、ロサスの亡妻の姉を家に住ませ、夫婦同然に暮らしているのは公然の秘密だった。またロサス自身はといえば、死んだ部下に頼まれて家に引き取り、病気の妻の世話をさせていた若い娘に、7人もの子供を産ませている。しかもその子供たちには自分の姓を与えず、使用人と同等に扱い、まともな教育も受けさせていない。

これまでのアルゼンティンの歴史では、ロサスは残酷な独裁者としての面しか取り上げられてこなかったが、現在では独立後混乱に

陥ったアルゼンティンの国家形成に果たした役割を再評価して業績を見直そうとする動きがある。しかしカミラの銃殺がロサスの時代に黒い影を投げかけたことは確かで、彼はその4年後に失脚し、権力の座を追われて英国に亡命した。孤独な独裁者の老後を最後まで優しく世話したのは娘のマヌエラだった。

(いとう・しげこ)

〔ラテンアメリカ参考図書案内〕

『アメリカの中南米政策— アメリカ大陸の平和的構築を目指して』

ロバート・A・パスター 鈴木康久訳 明石書店
2008年7月 504頁 6,000円+税

本書は、カーター政権の国家安全保障問題（中南米カリブ地域）担当大統領補佐官を務めた政治学者、ロバート・A・パスターの単著 *Exiting the Whirlpool: U.S. Foreign Policy toward Latin America and the Caribbean*, Westview Press, 2001 の全訳である。1992年に刊行された原著の第一版は、1994年および98年の米州サミットにおける「西半球における民主主義コミュニティ」の議論に一定の影響を与えたとされる。本書はその増補改訂版で、グレナダに関する新事実やクリントン政権の分析などが書き加えられている。

米州関係は長い間、「小さな国々が大きな問題」となるような、非生産的な循環—原著のタイトルにある「渦潮 (whirlpool)」はその比喻である—に陥ってきたという。即ち、キューバやニカラグアにおいて典型的にみられたような、独裁、革命、低開発、そして脆弱な民主主義である。著者はこのとき、米国の覇権的な力、或いはラテンアメリカの防御的な力のいずれかに偏って力点を置くのは問題を見誤っている、と指摘する。二つの力は相互に規定的で、共倒れの傾向を生む。

著者の回答は、各国が主権国家として国益を追求する自律性を保持しながら、価値と目的の収斂と共有によって国際協調を実現することである。人的・知的交流がこれに有利な土壌を提供する。相互依存論やソフトパワー論に通じる部分があり、米国のリベラル派のラテンアメリカニストとして押さえておきたい。

[笛田千容]